

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成15年
9月号

毎月23日発行
通巻397号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成15年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



満月 井手 泉さん撮影

昭和55 (1980) 年初め頃の座談会から 大倭紫陽花邑に住んで(1)

「前進友の会」の皆さんを迎えて

大倭会館にて

塚崎 精神障害者の共同生活というものを目指してやっている「前進友の会」という会があります。そこで共同住宅を作ろうという話が出まして、どのようにやっていったら良いのかということを考えています。その一つとして、紫陽花邑の生活がどのように営まれているのか勉強したいということになりました。

これまで、精神科の患者さんの集まりというのは、患者だけの集まりか、または医者が音頭をとって作っているというのが非常に多いのですが、「前進友の会」というのは、医者も看護者も患者もごちゃ混ぜで、一番患者のような顔をしている人が医者だったり、一番しっかりしている人が患者さんだったり、そういう意味では、これまでの運動から比べると

「前進友の会」について

昭和五十五年一月十九日、「前進友の会」というグループの京都大学の若い精神科医師、塚崎氏から、紫陽花邑を訪ねたいという申し入れの電話があつたと、当時の『おおよまと』に記録があります。実際につらられたかの記録はないが、その時の録音が残っていました。

二十年以上昔のことです。その後の「前進友の会」のことも分かりません。大倭紫陽花邑にも変化の姿があります。しかし心の流れは変わらないと、果たして言えるかどうか、初心に返ってみる一つの方法となれば幸いです。

編集部

なり枠が外れていると思います。アパートに、今だいたい十一人ぐらいが入っているんですけど、そこでの生活というのが「前進友の会」の一番中心的な性質を示しているだろうと思います。十一人が部屋を借りていると言っても、働いている人もいれば働いていない人もいて、病院へ入院していた人もいれば病院で看護人として働いている人もいて、そういった人達がごちゃ混ぜに暮らしている。時にはご飯を一緒に作って食べたり、しんどい時にはアパートの住人の所に転がり込んで夜遅くまで話してみたり……。そういう生活については、実際に住んでいる人から話してもらえたら分かっていただけるかと思うんですが。

その一番最初のきっかけというのが、京都に非常に大きく、ベット数もある病院があるんですが、そこに学生が五、六人アルバイトに行っていたんですね。行ってみたら非常にひどい医療内容であると。患者さんがそれでどんどん死んでいったりね。それから電気ショックといって、頭に電気を流して興奮を治めたりするような方法があるんですけども、それを懲罰的にやるとか、患者さんが言うことを聞かなかつたら、ほとんど薬を与えないで強制入院させてしまうとか。

「こんなことじゃ駄目だ」と看護人のアルバイトに行っていた学生達が、患者さんに「暇な時に自分のアパートに遊びに来て」と声をかけた。それで時には酒飲んで、そのまま寝てしまったりとか、退院して行く所のない人を自分のアパートに泊めて、ひと月もふた月も一緒に暮らすとかね。そういうような活動が基礎になって、次第に、いくら善意でやっても、患者さんと一緒に何日も暮らすわけにはいかなないから、同じアパートの一部屋をその患者さんも借りて、困った時には相談し合う。そういう環境を作ってきたのがどん

どん発展してきて、三年目に入った現在はそのアパートに十一人入っているということです。

それから月に一回、例会というのがあって、患者さん、医療関係者も含めてほしい三十人から五十人ぐらいが集まってきます。毎週土曜日になると別に理由もないけど集まってきて、酒盛りが始まるとかね。定期的ではないですけども二週間一回ぐらいは、何かの理由をつけて、みんなで飲み食いをしてたりとか。日常的に午後八時ぐらいになると、誰かが訪れてきて、何か知らないけれどワイワイ言うていると。とにかく、これまでのいわゆる患者さんの集まりとか、医者が作っているという集まりと比べると、非常にずっつけていると言うか、日常生活のルールというのがとっぱずれてしまつてね、ある意味で言えばメタメタ。だけど、そこで支えられていく患者さんとか、普通ならば退院できないで何年も何年も病院の中で沈殿してしまうような人達が、何かそういうバカバカしいような生活に触れていくことによつて、「自分もこれはやっていけるんちゃうかなあ」ということで退院できるとかねえ。

もちろんそんなに楽観的に言える人ばかりではないんですが、実際に退院できるとは驚くべからず、病院でも「あの人が退院できるとは驚くべきことだ」と、主治医自身が驚くような変化も起きているということなんです。自然にそうなってきたという面も強いんですけども、もつともつと京都の精神医療を変えていく力に「前進友の会」がなつていくんじゃないかということは、僕ら関わっているものとしては非常に確信が持てるんです。

だけど、ホントに強いものにしていくには、まだまだやっていかなければならないことがたくさんあるだろうと思う、今日は紫陽花邑の方達に教

中村恵一さん帰幽さる



元大倭病院常務の中村恵一さん(72歳)が、平成15年8月22日、大倭病院において帰幽され、24日、奈良市内で密葬が行われました。

中村さんは大倭会の幹事も務めて頂きました。故柴地則之さんの叔父というご縁から大倭病院の常務になつて頂いたのですが、青森や奈良のテレビ局に勤められていた時期が長く、その博識ぶりは驚くばかりでした。『伊勢本街道』(向陽書房)という本で執筆者の一人でもあり、大倭の「あぢさゝの句会」の発起人でした。

えてもらおう、ということでも来たんです。

岸田哲 そういふ場合、京都の町の中にもつと作つていこうと思われているわけですか？

塚崎 そうですね。今のところ、どういふ形態で広げていこうか、イメージとしてはもう一つはつきりとは出ていませんけど。生活を共有していくというのが、医療従事者とか、患者とかいふ枠を越えて、作り出していこうという動きが出てきているということが、非常に大きい意味があるだろうと思つています。

まあ、患者さんから見たらものすごく魅力があるんですけどね。やつている人は、ちよつとしんどいところもかなりあるんですけどねえ。

岸田 医者のあるたの場合でも、一緒に暮らし合うみたいなこと考えておられるのですか？

塚崎 一足飛びに、ぱつとやつたら、きつといろんなところに無理が出て来て長続きしないでしょう。いくつかの段階を経て、お互いにそういう雰囲気を作り出していったら、おそろくやれるだろう

うと、実際にやってきているという蓄積もありま
すから。それは、今すぐに誰かを僕の家に下宿し
てもらったり、というのはちよつとしんどいかも
しれませんけどね。

その辺はどうですか？ 共同生活について。

男性A 楽しいことと、しんどいことが極端に激
しいですね。例えば、自殺未遂事件が起こったり、
むちゃくちゃしんどい時もあるし、お酒飲んでも
のすごい楽しい時もあるし。住んでいない人から
見たら、なかなか物差しで計れない生活だと思ひ
ます。波があるみたいです。今はちよつと去年の
暮れぐらいから、いろいろあつてみんな沈んでい
るのですけど。

一時期すごい依存関係ができた時があつたんで
す。もう引越しませましたけど、アルバイト時代
からずつと病院に勤めていた看護士さんとそのお
嫁さんになる人がいて、その二人が僕らに飯を食
わせてくれていたんですね。でも去年の十月に合
宿やつた時から、「そんなやつぱりおかしいや
ないか」ということになって、それから、みんな
で食事をするようなことがだんだんと回数が少な
くなつてきて、今ではほとんどないんです。

塚崎 確かに、生活を共有しているから問題がす
ぐに、対人関係とか、いろんなところに出てきて
しまつて、それがまた非常にしんどいものを作つ
てきている。

けれど、またそこから学んできていることも、
ものすごくあると思うんですね。やつぱり一人一
人が自立していくことが肝心なんだけど、それを
言葉でだけ言っているのとはちがう。まあ、一つ
の部屋に実際に患者さんが一緒に、一週間も二週
間も寝泊りすれば、いろいろトラブルが生じるこ
うな現実です。

男性A 良い意味でも悪い意味でも自分の時間が

ほとんどなくなつてしまう。

塚崎 ホントにいろんな力の人がいるわけす
ね。発展そのものに、なかなかまどろっこしいと
ころがあります。家出同然で帰つて来ない人がい
たりするわけですが、共同生活をホントに一人一
人の中に根付かせていくことがどうしたらできる
のか。優秀でもなく万能選手でもなくスーパーマ
ンでもない人間でもね、やつていけるような方法
を作つていかなきゃいけないし、紫陽花邑の人達
にその辺で教えていただけることがないかなあ、
と思つて来ました。こういう問題があるんですけど
なかなか今すぐ言い難いんですけどね。いろいろと
お話ししていけば出てくるんじゃないかと……。

岸田 そういう感じで精神医療に携わつてい
る人
つてあんまりいないんですか？

塚崎 あんまりいないですねえ。やつぱり最初
の出発点が生徒の看護人だつたでしょ。つまり、専
門家として自分が充分に確立されていない。職場
にいても、「おまえらどうせ無資格なんだからご
ちやごちや言うな」とか言われてきたような人達
がね、専門家だからこうするんだじゃなくて、
「人間として何かやらなきゃいけない」というの
が出発で、それがどんどん広がつてきている。

「私は看護人だから」とバツと切つてしまえない
……人間同士じゃないかと。それも一般的ヒュー
マニズムじゃなくて、ホンマに自分の横にいる人
が社会復帰できないでね、どんどん絶望してい
くとか、自殺しちゃうとか、極端な場合は病院の中
で殺されてしまうとか、そういうのに直面してど
うするのか、というギリギリのところが出発点に
なつていって、頭の中で作つたというのではな
いのですからね。そこがこれまでの、「患者のため
にしなきゃ」とか、自分は医者なり看護人で「患
者さんが可哀想だ」「何かしてあげなければなら

ない」という発想とは違うので、そこがものす
ぐ大きいと思うんですね。

岸田 いろんな専門家がいて、専門家の
中で一番専門家のような顔をしているのがお医者
さんですよ。でも、そういうことをやりだすと、
専門家という顔をしていられなくなる場面がたく
さん出てきて、やつぱり辛いんじゃないですか？

塚崎 「専門家として」という発想を取り続けた
ら辛いけれども、まあどうせしたいことできな
いんだからと折れちゃえば、どっちもどちとい
うか、むしろ専門家面している人の方が、ありも
せんようなことをまことしやかに言うているんじ
やないか、という感じにはなりませんけれど。ただ、
同じ医者仲間では話を通じなくなつてくるとい
うか、「お前だけええかっこしてるやないか」とか、
そういう扱い方をされてね、そっちの方がむしろ
しんどくなつてきますねえ。

岸田 そのグループの中にお医者さんもたくさん
いるし、看護人もたくさんいるし、患者さんもた
くさんいるという感じなんですか？

塚崎 そうですね。だけど、医者は中心的な役割
を果たしてはいないね。それは患者さんであるし
普通の看護人になりきれない部分を持つた人が中
心で動かしていますねえ、学生とかね。

僕なんか医者になつて、ある程度経つてからそ
ういう運動に触れました。その時感じたことは、
「これはもう自分で考え出して作れる運動ではな
いなあ」ということです。付き合つていくことは
何とかできて、自分がゼロから作るつていうこ
とはおそろしく不可能だつたと思ひますねえ。やつ
ぱり看護助手のアルバイト、それと患者さんです
ねえ。そういう人達を信じて思い切つて社会復帰
をしようとして、手を取り合つて社会に出ていった人
達が、ホントに核になつてやつていますよ。ま

あ僕らは、そういうところから医者としてはエネルギーをもらっている。悪い意味でいったら、利用しているのかもしれないけどね。

やってる人達は、なるべくしてこうなったんだと言いますけど、僕らある程度距離を置いたところから見ていると、「ものすごいことをやっているなあ」という気はします。やろうと思ってることではないですねえ。そういう所へ自分から入り込んでしまったんでね、気づいてみたら「変なことをしているなあ」というか。

例えば、下宿の鍵を二十四時間開けておいて、そこに患者さんが入り浸り、というような生活を最初はやっていましたね。それは患者さんのために自分はこうしなければならぬのだと、パーンツとスローガンを掲げてやれるようなことではないですねえ。誰々さんのために開けておこうと、そういうようなところで出来ていったものです。

おそらく紫陽花邑の出発点も、似たところがあるのではないかと思っておりますけどね。紫陽花邑の歴史をもう一度教えていただけますか？

紫陽花邑について

杉本 順一 歴史は古い人に言うてもらわな。私なんか半分ほどしか居てませんから……。

法主 かえって若い者が説明した方がええわ。家族は客観的に見られんものがあるし……。

杉本 そうですねえ。どこから言いますの。やっぱり八月十五日ですかなあ？

法主 いや、そんなこと言うてたら、一年もかかってしまうぞ。(笑)

今聞いた話でも氷山の一角やろ。その程度でええわけや。その中でチクチクと掘り下げていって分かっていくんであつてね。話ってそんなもんや

ねん。現在からいつてもええやん。上から下に流さんかつても。なんぼデタラメ言うてもろてもかまへんやん。(笑)

杉本 そうですねえ……。大倭紫陽花邑はやっぱり、矢追日聖という人の個人家庭が、時間と共に量的にも拡大したというふうな考えたらうのが一番自然やないかと思うんですね。

法主さんが昭和二十年八月十五日を一つのきつかけとして、敗戦後の社会の「福祉」という問題を基本に捉えて、それを自分の人生を通して現していくというふうなところであつたと思うんです。

宗教というふうな形を取っていますけれども、僕らが一緒に生活していて、いわゆる世間で言う「宗教」とか「信仰」とかいうものとまったく別の、もつとこう自然に即した、人間の生活そのものの中にあるような、そういう心の問題というふうには僕は理解しています。それを中心に持つておられるんやと思うんですね。

今日、大倭の中の形を見てもいました。施設があつたり、事業所がいろいろあつて、非常に量的にも拡大されていますけれども、これはあくまで今の時点で言えることであつて、最初からこういう形を目指したとか、これが一つの最終目標でこうなつてきたとかいうことはなかつたと思つています。少なくとも僕が十五年ここで生活してきた中では、結果としてこうなつてしまったというだけで、「こうしよう」ということで出発したものはなかつたと思つてはいるんですけどね。

法主 まあ、そんなことやわな。

杉本 だから逆に、あまり形にこだわつて見てもらうと困るんですね。量的に拡大したから大倭が発展したと、この人は誰もおそく思つていないと思うんです。例えば施設が十人の定員から百

人になつても、それが発展したのかどうかは別の問題というのと一緒で、大倭というのは発展するとか退化するとかいうことは基本的にはないんでないかと、僕は思つてはいるんですけども。

自然に出来てくるということの意味を、どういうふうに説明してええのか、その辺が非常に難しいんですけども。何か大倭の青写真が誰かによつて示されて、それに基づいてみんながやっているといるものではないんですね。

紫陽花邑全体として考えたら、みんな同じことを考えて生きていたとは言い難いしね、何かを指してやっています、ということも言えない。しかし現実にはいろんな部署で、例えば福祉施設にしても三部門あつて、そこでそれぞれの入居者を対象に生活があるわけです。だから、個々にはいろいろあるんですけども、全体として別に、理想に燃える紫陽花邑の目標を掲げて、それにみんな心を合わせましようということもないし、こういうことをみんなでせなあかん、ということもないんですね。

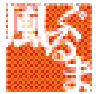
普段から、掃除なんかでも邑全体をする場合は、日を決めるんですけども、そういう場合でも強制的にみんなが出てこなあかんというのではなく、自分の生活の環境を綺麗にするという単純な意味で、それぞれが出てきてやっていると、一つ一つの生活の中には細かいルールというものがほとんどないというか、そういうものによつては運営されていないですね。

生活の面で見ても、枠を持って誰かが誰かをしるということもないし……。まあ矢追日聖さんという人がそこにおつて、朝からみんなに「これせえよ、あれせえよ」ということで命令があつてね、それに基づいてやっているとあつたら、まったくないわけ。

(続く)

はじめが肝要

奈良市 五十嵐 章



平成15年6月23日、大倭教拝殿で執り行われていた月次祭が終わろうとする頃、編集部の方野春子さんが私に近づいて来られて、『おおよまと』に掲載する原稿を書いてほしいと告げられた。岸野さんは、私の執筆の一助として、『大倭新聞』23号に掲載していただいた昭和41年8月26日付けの「バンコックよりの便り」と、昭和42年発行の冊子『大倭』9月号に掲載していただいた私の記事「タイ―感じたまま」の写しを私に手渡され、「先月の月次祭でのSARSに関する講演は録音してあるが、内容が専門的過ぎるので、改めて寄稿をお願いしたい」と申し訳なさそうにおっしゃった。私も、SARSに関する講演はWHOなどからすでに発表されていた情報や知識を急遽取りまとめ、一般に理解しやすいように並び替えたもので、文章の獨創性や情報の独自性に乏しく、内容的にも『おおよまと』の記事にはふさわしくないと思っていた。

その様な事情で、約36年前に私が書いたとされる2つの記事を読み返して見たところ、当時の私が高齢の私に比べて身辺の事情に対してはるかに高い感性を持っており、時代の情勢にも純粋な判断を下していたことを改めて認識し、驚きの念を感じざるを得なかった。

36年前の私は、国際協力事業団（JICA）の医療協力プロジェクトに参加して、発展途上国に

対する日本の海外援助を担う国際的役割を演ずるという、肩の張った気概に満ちていた。それと同時に、研究室内の単なる「研究のための研究」を超えて、学問・研究の成果を応用して、人類が現実的に直面している疾病の予防治療に健康増進に貢献する「実用的研究」を推進したいという「野望」を抱いていたことも事実である。そのような背景に立つて、大阪大学大学院医学研究科を修了したばかりの、研究者としては極めて未熟な若輩の身でありながら、恩師「深井孝之助先生」に頼み込んで、タイ国立ウイルス研究所プロジェクトの長期専門家として、1966年2月から1967年9月までの1年6ヶ月間バンコックに滞在することになった。このような行動は、悪く言えば「自己顕示性」を具現化した「常軌を逸する冒險的行動」と一般的には認識されることが多かった。しかしこの行動によって、私が初めて訪れた外国がタイ国であったことは、その後平成13年3月末日に長崎大学を停年退官させていただくまで、私の専門分野となった「熱帯性ウイルス病」の研究という方向性を規定したことは間違いない。この間、私の置かれた立場から多くの外国人留学生・研究者と接する機会に恵まれ、それを通じて少しでも「異文化」ないしは未知の世界を理解できたのは幸いであつた。

ここで私が云いたいことは「何事もはじめが肝要である」ということである。私は仏教に深い憧憬と知識を有するわけではないが、「初発心時便成正覚」という文言は私なりにその意味の深さを痛感している。この言葉は、最初に悟りを開こうと志したときすでに悟りを開いているという意味であり（間違っていたらご容赦願います）、初心の重要性を強調したものと理解している。

仏教の説法から逸脱して、自然科学の話題を2

こだまこだま

03・8・17

青森県弘前市 高橋 末子

「上皇宮で津軽神楽を九十年振りにやる。見にこねが」と、氏子総代の石田健一さん（写真右端）からの電話に、おつちよこちよいの私は、石田さんご縁のある平谷さんや岸野さん、松本モトさんに早速電話を入れました。松本さんは見学しますということで、喜びが二重となりました。

七月十二日の前夜祭、上皇宮事務所は満員の人数です。津軽神楽を初めて見る私は興味がつきませんでした。神楽とは神慮を慰め奉り、神人和合の境地を醸成するものですから、御祭神である長慶天皇の霊がここに来て、氏子の方々や私達大倭のご縁のある人と共に喜んでいらつしやるなど思い、そして又法主様も一緒に楽しんで下さっていると思つたら、もう涙が出てなりませんでした。

平成六年五月三十日、この上皇宮の頂上の長慶天皇の御陵墓で、法主様、母さん、高橋良美さん、見田さん、そして地元の人達と一緒に遊んだことは私の人生の中で一番うれしいことです。

法主様にとつて上皇宮は、お父様や柴地さんとの思い出の場所でもあると思ひました。（※『ながそねの息吹』中の「長慶天皇の御心痛を偲び、再度津軽の御陵墓に詣る」参照。一四〇三年に崩御され、今年にはちょうど六百年に当たる）



く3述べさせていたきたい。新型肺炎として世界を恐怖で揺るがせたSARSも一段落した模様であるが、一般に感染症に対して人類その他の動物がその命を守る方策として「免疫」(immune)という機構が存在する。免疫とは、「一度罹った病気には2度と罹らない」という経験的現象であるが、互いに関連のあるいくつかの病原体に次々と感染した場合、ヒトは最初の病原体に対する反応を記憶しており、2回目以後の感染では、新しく感染した病原体よりも、最初に感染した病原体に対してより強い反応を示すという事実がある。このことは「初恋の味は忘れられない」ことに例えられ「抗原原罪説」(original antigenic sin)と呼ばれるが、生命科学における初体験の重要性を示している。また、卵から生まれたばかりのアヒルの雛は、最初に目に入った動く物体を母親と認識して、以後それに従って行動することが知られている。このことは「刷り込み現象」(imprinting)と呼ばれ、生命科学領域における初体験の重要性を示す今1つの事実であろう。

一方ヒトの胎児は母体内ですでに母体外からの刺激に反応していることが知られており、いくつかの原体験は出生前からすでに始まっているともいえる。このような事実を理解すれば、昨今世の中に凶悪犯罪が跋扈し、犯罪者の若年化をもたらしている要因の1つは、量的・質的にあまりにも強烈な刺激が甚に氾濫していることではなからうか。一方では、効率化の名の下に行われている経営合理化ないしリストラ(restructuring)が、多くの人々から職を奪い、ひいては購買力の低下、税収の減少、といった悪循環を経て「デフレ現象」に連なっていることは多くの有識者が指摘している。

私たちはそれでは何をすればよいのか？ 私

このような根本的な問いに答える立場にないし、指導者としての資質も持ち合わせていない。しかしながら限られた私の体験からすれば、文化の多様性を認識することによって異文化を理解する寛容性と、生命現象の複雑巧妙さを学ぶことによって得られる命に対する畏敬の念に立脚し、広大無辺の宇宙において人類が生存できる唯一の惑星であるこのかけがえのない宇宙船地球号の上で、人類が他の生命体と共存共栄することによって持続的繁栄を遂げるためには、物事に対する「価値観」を根本的に見直すことが求められているのではなからうか。この意味では逆説的かも知れないが、いわゆる「発展途上国」が文化的には実は先進国であり、先進国のひとつを自認するわれわれが学ばなければならない多くの教訓を与えていることを申し上げたい。その詳細な具体例については機会があれば改めて記述したい。

稿を終えるに当たって、私の今日に至る生活は実に多くの人々と自然の恵みによって支えられてきたことを改めて痛感し、感謝の意を表する次第であります。(平成15年7月12日)

第15回 大倭会文化講演会

☆日 時 / 平成15年11月9日(日)

午後2時より

☆場 所 / 大倭紫陽花邑 拝殿

☆テーマ / 尺八を聴く

☆講師・演奏者 / 石川利光 氏

石川利光氏は、「尺八が人間の心の在り様を表現するのに非常に優れた楽器である」として、国際的にも活躍されている尺八の著名な演奏者です。今回は演奏していただくだけでなく、尺八についてのさまざまな楽しい話題を語っていただきます。

入場無料

にぎわ 賑栄い塾 (第8回「3人の会」)

八年前から野本三吉さん、阿木幸男さんと岸田哲の三人で一年に一度、主に東京で開いている「三人の会」を、三年前には大倭で「賑栄い塾」と名付けて開催しました。今回も第八回目の会を「賑栄い塾」と称して、ゲストに真木悠介さんと出口三平さんを招いて開くことになりました。

■日 時 .. 10月18日(土) 午後2時 ~ 10月19日(日) 午前11時30分

■場 所 .. 大倭紫陽花邑 大倭会館他

■テーマ .. 「いのちのつながりを考える」

■話し手 .. 真木悠介・出口三平・野本三吉・阿木幸男・岸田哲

■参加費 .. 宿泊参加 1万5千円 宿泊を伴わない参加 1万2千円

■申込み .. 住所・氏名・年齢・性別・電話・宿泊の有無等を明記の上、左記の住所まで郵送で10月5日までに申し込んで下さい。

千六三〇一八一〇一

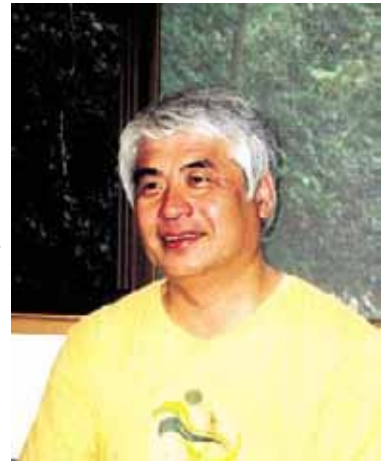
奈良市青山三丁目一番地20の301 岸田 哲 宛

※なお、会場と準備の都合上、宿泊参加を30名(全体で60名程度)に限定しますので、お早めに申し込んで下さい。後日、宿泊の可否等は返信させていただきます。

寸 莎

第56回

柳 川 義 雄 さん



韓国キャンプの三十年

大倭にある「交流の家」を拠点に活動しているF I W C関西委員会が、韓国にあるハンセン病快復者自活のための「定着村」で日韓合同の夏期ワークキャンプを始めてから、今年で三十年になる。今回の「寸莎」で登場してもらおう柳川義雄さんは、この三十年続いたキャンプの中心的役割りを果たしてきた人である。

「この韓国キャンプが始まったのは、一九七一年に邑人の金昇允さんを尋ねて大倭を訪れた韓国の吳済天牧師と故矢追日聖法主とが意気投合して、定着村の『炭洞再活園』と大倭紫陽花邑とが姉妹村となったのがきっかけで、最初のキャンプはその二年後に実施された」と柳川さんから聞いて、筆者も韓国キャンプのルーツをあらためて再認識させられた。

「姉妹村になった翌年秋、当時交

流の家の管理人だった飯河四郎さんと一緒に韓国に挨拶に行つて欲しい、と法主さんに頼まれて、学生だった自分はボディガードのようなつもりで十日間の韓国の旅をした。その時に案内してくれた吳牧師の情熱と人柄に強く魅かれた」と、その後の彼の人生にとって大きな転機となった旅について語ってくれた。その話しの続きに入る前に、ここで今から半世紀あまり遡って、彼の生い立ちにまずふれておくことにしよう。

父親が自動車の電気部品の修理工場の共同経営者であった影響もあってか、「将来は電気技師になりたい」という希望を抱いており、四日市高校から大阪大学の電子工学科へ進学した。ところが、時は一九六九年の大学紛争の真っ只中で、十月まで授業がないという有様だった。「下宿で毎晩のように議論したりマーシャンをしたり、いくつかのサークルに顔を出したりしていたが、F I W C関西委員会のワークキャンプにも、さそわれて参加し、びっくりした」。

柳川さんにとって、ワークキャンプは思いがけない別世界だった。「そこにはすごい人達がいて、優等生の自分を支えていた価値観が崩れていく衝撃があった。でも、それは自分のとらわれが崩れていく快感を伴ったものだった」と当時を思い返す。

「大学にはほとんど行かず、交流の家やライ療養所に入りびたる日々が続く」、前述の韓国への旅を発端にして、吳牧師と協力しつつ日韓合同のワークキャンプの実現に深く関わっていくことになる。大学の方は、「主任教授に対する批判もあって」、電子工学を学ぶ気がしなくなり、五年目に法学部に転部した。

一九七三年八月の第一回キャンプが行われたあと、毎年八月になると韓国各地の定着村で道路整備、石垣積みなどのワークをしつつ、定着村の住民や韓国の学生達と交流を深めていくのだが、柳川さんは、「この三十年で参加しなかったキャンプは一回だけ」という思い切った入れ込み方をしていく。もちろん、ハンダルの語学力もめきめきと上達する。

大学卒業後に、「しばらく定着村で住む計画があったが、ビザがとれずに頓挫し、法主さんのさそいで大倭の長曾根寮で三年あまり働いた」こともあった。その後、父親が亡くなって四日市へ帰り、損害保険の代理店を始めて今に至るのだが。そうした職業生活も、「すべて夏の韓国キャンプには参加できるよう段取りしてきた」とのこと。「結局、忠光農園の盲目のリーダー、金新芽さんに代表されるような、定着村の中で自活して生きていこうとする快復者の人達の前向きなエネルギーに自分もつき動かされてきた」のだという。

韓国キャンプの動きはさらに拡大して、二〇〇一年からは、韓国のグループとともに中国広東省のハンセン病快復者の村でのワークキャンプも始まっている。「今、五十二歳だが、体力のある限り中国キャンプも続けていきたい」と笑顔で言う。

大倭で出合った広美夫人と三人の娘も柳川さんの夢の大きな支えになっているようだ。（聞き手＝岸田哲）

あじさい日誌

8月12日 東光大祭及び祖霊祭。参拝の皆さんで拝殿が一杯になりました。ドイツ人の女性

が経木に先祖の名を出されたりまた別にアウシュビッツを訪ねて来た日本人がユダヤ人を慰霊されたりと、いつもと変わったこともありました。

夕方からの大倭会館の直会には60名を超える参加者。月の出の時刻には三三五と東方碑の前に寄りましたが、残念ながら雲がいたずら。一瞬、淡いピンクが放射状かなあとというぐらいに雲を染めたように見えました。その後、大倉弘師匠「ご一統の音頭で踊りの輪。水野勝美さんにも「踊りやすくなつたわ」と声がかかり、家族的な雰囲気

皆さんも多く、その交歓風景も和やかでした。
8月15日 大倭神宮で立教開宣の日のお参りをしました。
8月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は8月の第4土曜日で夜は弥栄踊りが行われました。東光大祭が平日で来られなかった方もお見えでしたし、例年にならないほど子供達がたくさんで



た。本物の音頭取りさんによる

〈田んぼ通信〉
稲刈りと柿掛けのご案内
 10月11日(土) 午前9時30分～
 冷夏で心配された爽りも後半の暑さでもりかえして来ました。
 今秋も、どうぞふるってご参加下さい。
服装
 長袖・長ズボン・長靴。帽子とタオルは各自ご用意下さい。軍手と鎌は用意してあります。
昼食・飲み物
 ご用意します。(差し入れ歓迎)
 連絡先 Tel 0742-41-4615 (双葉館)

地域の祭りとして定着しているようです。弥栄踊りをスタッフとして支えた若者達は、今は邑を離れた者も来ていて明け方近くまで話しがはずんだということです。
8月24日 午前中、弥栄踊りの

後片付け。オツカレさま！
8月26日 夜、教務本庁での本紙編集会議。早くも新年号の特集のテーマが話題になりました。ご意見や書くて手を上げて下さる方等、歓迎します。
9月1日 夏休みも終わり、子供達も2学期開始。大倭会館の喫茶「和み」も再開。が、厳しい残暑です。

湯浅芳郎さんが参与として大倭病院の仕事につかれました。
9月6日 大倭神宮月次祭。この日は、神宮の月次祭が6日に行われるようになった記念の日です(『ながそねの息吹』287頁参照)。大津市の白井たま枝さんも参拝されました。
夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では
(菅原園)
9月5・6・7日 3つの棟毎にサンルームで立派な竹を使って流しそうめんをしました。
(須加宮寮)
8月19日 屋上で焼肉や冷麺で夕べの集い。カラオケや踊りを楽しみました。
8月31日 住苑者と職員が一緒になって芸を披露する「須加宮寮演芸会」を行いました。
(長曾根寮)
8月21日 3階で定例懇談会。今月は食事がおいしくなったという言葉を頂きました。
(八重垣園)
9月2日 今年も鈴虫を届けて

頂き、3階ロビーでリーナーンの大合唱に秋を感じました。

あんなない

*月次祭 (大倭神宮)
10月6日(月) 大倭神宮にて午後2時より。
*大倭会主催第四一九回禊会
10月12日(日) 大倭大本宮拝殿にて午後2時より。(11月の禊会は文化講演会となります)

*月次祭 (大倭神宮)
10月15日(水) 大倭神宮にて午後2時より。
*月次祭 (大倭大本宮)
10月23日(木) 大倭大本宮拝殿にて午後2時より。
【お詫び】先月号「時の波瀾(四)」で2カ所、入力ミスでした。正しくは「クシイナダ(ゴヒメ)」「その八重垣を(に)」。

▼表紙の写真は以前に矢田丘陵で撮影した中秋の名月です。日没後の残照の中、東の地平からうすすらと満月が浮び、刻々と昇るにつれて、奈良の街明かりと呼応しながら輝きが少しずつ増して行く、その色合いの変化がとてきれいでした。
ところで、今年は火星が地球へ大接近する6万年に一度の年と言われ、折しも今夜は十三夜、火星と月と地球が一直線上に並び、と言われた通り、月の右下に寄りそう様に火星が見えました。ちなみに火星はローマ神話の軍神。世界中で戦争の危機が増大しているのはそのためでしょうか。願わくは神々の間も人々の間にも平和がありますように。
9月9日夜(一)

編集後記

第276回大倭会文化行事
秋の一泊旅行のご案内
 ～壇ノ浦に平氏滅亡の跡を訪ねる～
 日時 平成15年10月26日(日)～27日(月)
 ルート (1日目)奈良→新大阪→福山→下関
 (2日目)安徳天皇陵・赤間神宮・七盛塚・近辺観光→奈良
 お泊り 下関マリンホテル ☎0832-46-3111
 定員 50名程度(先着順)
 費用 3万5千円(Aコースの場合)
 申込み 10月5日まで、世話人へ次のコースで参加募集します。
Aコース 新大阪・福山間は新幹線を利用、他はバス。
Bコース ホテルへ直行、2日目団体行動。
 世話人 湯浅芳郎(電話0742-48-3389)